

密教經典における性差への視座

橋本 弘文

1 はじめに

仏教經典の多くは男性中心的視野を披見しており、随所にその様子が見てとれる。その代表例として「五障（五碍）説」と「変成男子説」¹の2つが挙げられるだろう。これらは女人はその身では天部・仏・菩薩に転生できない、転生するには女身から男身への性転換が必要とする説である。このような考え方はすでにジャイナ教にも認められており、女人は男身に再生しない限り解脱は不可能とされている²。これら一連の見解はインドにおける宗教的・社会的な女性差別を露呈させた結果であり、大変悲しい境遇を比丘尼・一般在家女性に突きつけている。また顕教に限定してみた場合、このような女性差別思想の文言にはいくつかの原因があるなか、特に律蔵から派生した戒律の構造も大きく現実世界において影を落としていると思われる。

さて、真言密教における根本經典であり、中期密教集大成でもある『大日経』・『金剛頂経』には、先述の女人に対する仏成就することに男身優位・女身劣勢のような差別的解釈は存在しない。このような経緯もあり、後期密教では実際にチベットにおいて尼僧が成就法を成満させており、現世における女身のまま仏位へ到達できることを顕現させた。

女人の修行階梯の差別的解釈に対し顕教は苦慮してきたにも関わらず、いかようにして中期密教經典以降は超克なしえたのであろうか。その論理の軌跡を追うにあたり、まずは女人の成就というものをどのように捉えていたか、本稿では『大正蔵』に掲載される漢訳密教經典を中心に、その傾向と各經典に解釈の誤差があるのか確認する。尚、本稿では漢訳密教經典での考察を行うが、「成就」(siddhi)に注目し考察を行う。

2 中期二大密教經典にみられる女人の立場

本来であれば密教經典を読むにあたり梵蔵經典も照合すべきであるが、本稿はあえて漢訳に焦点をあてる。以下、中期密教の二大經典のなかで女人がどのように成就を到達させていくのか列挙する。

『大日経』

令彼諸菩薩衆。菩提心清淨知識其心。祕密主若族姓男族姓女。欲識知菩提。當如是識知自心。祕密主云何自知心。謂若分段或顯色或形色。或境界。若色若受想行識若我若我所。若能執若所執。若清淨若界若處。乃至一切分段中求不可得。祕密主此菩薩淨菩提心門。名初法明道。菩薩住此修學。不久勤苦。便得除一切蓋障三昧。若得此者則與諸佛菩薩同

等住。當發五神通。獲無量語言音陀羅尼。知衆生心行。諸佛護持。雖處生死而無染著。爲法界衆生不辭勞。倦成就住無爲戒。離於邪見通達正見。復次祕密主。住此除一切蓋障菩薩。信解力故。不久勤修。滿足一切佛法。祕密主以要言之。是善男子善女人。無量功德皆得成就³。

『金剛頂經』

次當說祕密成就於婆伽入身女人或丈夫一切想入已彼身令遍舒如是等心眞言⁴

ご周知の通り、二大中期密教經典ではしかるべき男女が揃うことにより、仏位への成就が叶うことが明確に説かれており、その両者の立場に優劣を認めない。無論、すべての密教の立場としては、これらの内容を根底に内在させており、こと瑜伽行に特化される解釈部でもあろう。

『大日經』では、祕密主が「もし男性あるいは女性であれば、識を欲し、菩提や自心を識知できる」と説く。では云何にして自ずからそのことを知ることかできるかという問題に対してまず中觀思想を説き、祕密主はこれを習得することができた菩薩の淨菩提心門を「初法明道」と名付けた。この境地に住することで一切の蓋障を除き、三昧を得ることができる。つまり彼らは諸佛・菩薩と同等となり、五神通を發し無量語を獲て、秘密陀羅尼をとこなえることが可能となる。そして一切の蓋障が除かれたこの菩薩たちは信解力によって、しばらく勤修しなくても一切の佛法を満足し、無量功德を全員成就するとして、男身・女身ともに平等に仏位へ到達する可能性があることを明確に説いている。この状況はやはり中觀思想を基底に密教の教理が構築されている旨を明確にしているので、『大日經』の大きな特徴のひとつを示しており、密教の学修において基礎学修になる部分なので、その箇所にも男女の立ち位置も明確にされていることを行者たちは念頭に置くことになり、それは非常に重要なことであろう。

一方『金剛頂經』では、密教の精度が一層上がる。男性あるいは女性はこの現世で授かったままの身体をもって、心眞言を遍くのべることで婆伽に一切想入し、秘密成就を成功させるという。この場面で述べられている「秘密成就」こそ、密教の真髓でもある仏位へ入る深義の成就法の存在を示唆する。

では、このような男女平等（身体における性差への平等）的解釈に至るにあたり、前段階としてその他の密教經典では同じように平等的解釈を行っているのか、あるいはそうではない内容もあるのか次項より順次考察する。

3 その他の密教經典にみられる女人の立場

中期密教二大經典を除く、その他の密教經典における身体的性差問題について以下分類する。本稿は『大正蔵』密教部全4巻所収の漢訳經典に説かれる内容に基づいて分類を行った。尚、一部の儀軌・顕教的經典については本稿で扱わない。

經典名	訳者	仏成就に対し 性差の記載 なし	仏成就に対し 女性劣勢 (配慮含む)の 記載有り	仏成就に対し 女性優位の 記載あり	梵文あるいは 藏文經典あり
『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』(No. 0867)	金剛智	○			
『一切如來大祕密王未曾有最上微妙大曼拏羅經』(No. 0889)	施護	○			
『蘇婆呼童子請經』(No. 0895)	輪波迦羅		○		○
『陀羅尼集經』(No. 0901)	阿地瞿多	○			○
『菩提場所說一字頂輪王經』(No. 0950)	不空	○			
『五佛頂三昧陀羅尼經』(No. 0952)	菩提流支	○			
『一字奇特佛頂經』(No. 0953)	不空	○			
『如意寶珠轉輪祕密現身成佛金輪呪王經』(No. 0961)	不空	○			
『寶悉地成佛陀羅尼經』(No. 0962)	不空	○			
『佛說大孔雀呪王經』(No. 0985)	義淨	○			○
『廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經』(No. 1006)	菩提流支	○			
『菩提場莊嚴陀羅尼經』(No. 1008)	菩提流支	○			
『佛頂放無垢光明入普門觀察一切如來心陀羅尼經』(No. 1025)	施護		○		
『千轉陀羅尼觀世音菩薩呪』(No. 1035)	智通		○		
『金剛頂瑜伽千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經』(No. 1056)	不空		○		
『如意輪陀羅尼經』(No. 1080)	菩提流志			△	○
『觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經』(No. 1083)	寶思惟			△	○
『佛說大方廣曼殊室利經』(No. 1101)	不空			○	×

『佛説金剛手菩薩降伏一切部多大教王經』(No. 1129)	法天			○	
『佛説隨求即得大自在陀羅尼神呪經』(No. 1154)	寶思惟			○	
『佛説大乘聖吉祥持世陀羅尼經』(No. 1164)	法天	○			
『八大菩薩曼荼羅經』(No. 1167)	不空	○			
『佛説大乘八大曼拏羅經』(No. 1168A)	法賢	○			
『金剛頂超勝三界經説文殊五字眞言勝相』(No. 1172)	不空	○			
『金剛頂經曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品』(No. 1173)	金剛智	○			
『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王經』(No. 1177A)	不明	○			
『佛説文殊師利法寶藏陀羅尼經』(No. 1185A)	不明	○			
『文殊師利寶藏陀羅尼經』(No. 1185B)	菩提流志	○			
『聖妙吉祥眞實名經』(No. 1190)	釋智	○			
『無能勝大明陀羅尼經』(No. 1234)	法天	○			
『佛説最上祕密那拏天經』(No. 1288)	法賢	○			
『佛説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』(No. 1314)	實叉難陀	○			
『大吉義神呪經』(No. 1335)	曇曜	○			
『大威徳陀羅尼經』(No. 1341)	闍那崛多	○			

上記の表のように分類したが、その殆どが『大日経』『金剛頂経』と同じように身体的性差への平等性を説くなか、注視すべきはこれまでの顕教で見下げられてきた女人・龍・鬼等の劣勢的立場に置かれた者たちについて、立場を大幅に転化した文言を残す密教經典が明らかに1つ存在していたことである。もうひとつはさらに変化し、女身が男身より優勢に立ち成就を成満することを明確に述べている密教經典の存在であるが、このように解釈ができるのは後期密教經典以降の特徴と筆者はこれまで認識していたにも関わら

ず、その分類にとらわれない漢訳密教經典が存在していたことに気づいた次第である。

事項より、まず最初に女人成就に関し、仏位に到達するときにほぼ同時に得る「一切種智」について考察する。

4 「一切種智」を得る

爾時觀自在菩薩摩訶薩。告多羅菩薩言。若女人爲欲成就一切種智。及欲滿足世間勝願。應當修習如是祕要。其曼荼羅。一如今日釋迦如來在淨居天宮。與諸菩薩集會之位。其修行者先應擇地。或於山峯或於河岸。或近大海華菓泉池。寂靜之處離諸危難。及蔑戾車怨賊毒蟲。旃陀羅等雜穢之處⁵。

ここでは、仏界へ女人が入るにあたりどのような階梯を踏んでいくのか、その一部を説いている。この階梯は秘密事相を示唆しているのだが、「一切種智」を得ることを願うことにより、仏界へ入っていく事実を本稿では注視したい。

『佛説大方廣曼殊室利經』は不空訳の漢訳經典のみで、梵蔵經典は見つかっていない。果たして後期密教經典と言えるのか不空訳という点から考える場合なんとも言い難いが、その要素は散見するように思う。「多羅菩薩」とは妙女の姿をなし、左手に青蓮華を持する。この菩薩を中心に説かれている經典である。多羅菩薩といえば、チベット仏教ではチッタマニターラ成就法の所以にあたるため、大変有名な菩薩でもある⁶。

ところで、タントラ仏教の隆盛時代(9-11c)には密教行者たちにより罪過(āpatti)に関する著作が幾つも著されたが、14個の根本罪過(mūlāpatti)と8個の根本罪過(sthūlāpatti)の数と内容についてはほぼ一致しているとされている。ラクラ・ソナムチュードップ著『大楽国土誓願の註疏』において十四根本墮(mūlāpatti)について以下のように挙げている。「秘密真言の誓言(三昧耶)は無上〔ヨーガ〕タントラすべての共通の根本墮罪十四について(1)上師・金剛軌範師を非難すること、(2)仏陀のお言葉に違反すること、(3)〔瞋恚により〕金剛兄弟を傷つけること、(4)〔有情への〕慈心を棄てること、(5)故意に精液を出したこと、(6)〔自派と〕他者の学説を非難すること、(7)福分なき〔未成熟の〕者にも秘密を宣説したこと、(8)〔五仏の自性である〕五蘊を苦と見ること、(9)自性により清浄である法に疑いを持つこと、(10)十悪の怨敵を度脱できるのに度脱しないこと、(11)〔常断などの〕戲論を離れた法性について論理学の知により〔実体的な〕相として観察すること、(12)器のある〔浄信する〕学徒を軽視すること、(13)時期が来ても三昧耶の品に依らないこと、(14)智慧(般若)の自性〔である〕女性を棄てる(見下す)こと、〔すなわち合計〕十四である。」と述べている。

上記で引用した經典の箇所は、女人に限定して「一切種智」⁷の獲得について言及しているものだが、その点は後期密教の「十四根本墮(mūlāpatti)」⁸の「(14)智慧(般若)の自性〔である〕女を棄てること」とする罪過のなかの、まさに「その女性」とほぼ同義の印象を受ける。後期密教で指す「智慧」は女性名詞であり、女性＝「智慧(般若と

同義)」を象徴し、男性名詞の「方便」との合一（つまり成仏）を目指す観想行がなされるのは周知のとおりである。こと、この行法は難易度を極め、言語表現に依ってその行程・内実が明かにされたり、事相に関する文献を読解することに頼って理解可能になる、そのような安易なものではないことは密教の大原則であり、当然のことである。

よってこの件について明文化が許されるとするならば、密教において、特にその真髓の教理には、初期・中期・後期密教いづれの經典成立時期・流布した場所にかかわらず、男女ともに侮蔑を含んだ性差別の概念は決して存在しえないこと、このことだけは筆者は断言したい。

5 女身を具える者への言及

復次蘇婆呼童子。今爲念誦人。說呼摩法置 爐差別之法。此法或作團圓。或作三角或作四方。或如蓮花之形。並須有基。爐口安唇。泥拭細滑。外邊基階並須牢固若作善事及求錢財。令他敬念息災法者。其爐須圓若求成就一切諸事。或求女人及童子女等者。其爐須蓮花之形若作阿毘者囉之法。或爲走等事者。其爐須作三角若欲調伏諸龍及餘鬼類。或令火燒或令苦者。其爐須方。基唇及爐。以瞿摩塗。復用茅草。布於基上及安基下。所塗之處。塗花香等隨所辦物。供養三寶及本部主。并諸明王本眞言主等爐中生火。不應以口吹。以扇扇火。然後取稻穀花和酥。或胡麻和酥。以本部明王眞言念誦。而作呼摩七遍。或八或十乃至二十一遍。供養明王。其作法人。面向東坐。取酥蜜酪等。共和一器中。取呼摩木。向器中盪於兩頭。擲於爐內燒之。如是日月不停⁹。

『蘇婆呼童子請經』¹⁰ について『仏書解題』では、密教の律部に該当するが真言宗ではあまり重視されていないとある。しかし、これまでの先行研究などをみていくと、真言密教での事相部に大きく影響を実際は与えているとし、必修の書として広く受け入れられているのが現状である¹¹。

上記引用經典文の「分別道分品第十」概要を簡潔にまとめるならば、①念誦する者は八正道を行じなければならないこと ②西夏安居に成就法を行じてはいけない ③蘇摩の爐形と修法の種類 ④修法の期間 ⑤護摩の火焰の形状並びに音に依って、修法の成・不成を知る方法を習得すること ⑥3箇所の毛を剃除してはいけない ⑦諸天・龍・鬼尊を祀れば障難がない、など以上7項目について記載されている。この全体の内容のうちに、上記引用文は③に該当し、成人女性と少女に限定して修法の際、爐の形体は蓮華型であること、さらにこの一文の後ろの方でも龍・鬼等に対しても同じく爐の形状がどういったものか詳説しているので、これらは女身や龍・鬼等を格下ないし差別的に解釈をしてきた顕教での背景のもと、それらの概念を転化させ、仏成就への並々ならぬ強大な力を具える諸々の存在と再解釈し、新たな意味づけを密教の立場により行なったと考えてよいのではないだろうか。

6 成就に対する身分差別の影響

①爾時觀自在菩薩摩訶薩。復白佛言世尊。是祕密如意輪陀羅尼。復有二法。一在世間。二出世間。言世間者。所謂誦念課法勝願成就。攝化有情富貴資財。勢力威德皆得成就。言出世間者。所謂福德慧解資糧莊嚴。悲心增長濟苦有情衆人愛敬。斯經祕要當密祕持。無識之人不應宣傳。若證此祕密三昧耶者。當自祕持勿妄宣說。若真成就此陀羅尼最勝法者。當一切處若食不食若淨不淨。一心觀想聖觀自在相好圓滿。如日初出光明晃曜。誦斯陀羅尼無有妄念。常持不間一無過犯。則得聖觀自在現金色身。除諸垢障神力加被。心所求願皆乞滿足。證諸神通安怛陀那法。多聞持法如意珠法。住年藥法雨寶雨法。見伏藏法入阿修羅窟法。隨意形法種種藥法。杵法瓶法世出世間諸所樂法皆得成辦。若有國王。王后嬪妃。王子公主宰官。婆羅門刹利毘舍首陀比丘若男若女童男童女若諸外道。伏信斯法而受持者。應知時數。若國王誦念時於七日中。六時各誦一千八十遍。若后嬪妃每時當誦九百遍。若王子誦八百遍。若公主誦七百遍。若宰官誦六百遍。若婆羅門誦五百遍。若刹利誦四百遍。若是毘舍誦三百遍。若首陀誦二百遍。若比丘誦一百八遍。若男子誦一百六遍。若女人誦一百三遍。若童男誦一百遍。若童女誦九十遍。此名課法。持念稱名一切勝事皆獲成就。富貴福樂資財穀帛奴婢象馬。一切樂具隨意增長。明者時數每從後夜至明相時。誦一千八十遍常不間廢。則得成就一切無邊之事。百由旬內地天男女。捷疾如風歸敬讚歎。若欲聖觀自在現與願者。清淨澡浴末香塗身。著淨衣服食三白食。隨力所辦香花香水。三白飲食果菴供養。沈水香白栴檀香等和酥蜜。面東結加趺坐。想聖觀自在誦如意輪陀羅尼。一明一燒滿十萬遍。聖觀自在現身教語成就明者一切諸願。若欲執金剛藏菩薩現者。沈水香安息香等和酥蜜。一明一念執金剛藏菩薩。一燒滿十萬遍。執金剛藏菩薩而自現身。觀念明者愛之如子。授與一切持明法器若欲一切諸佛菩薩現者。以沈水香一明一念一切諸佛菩薩。一燒滿十萬遍。諸佛菩薩皆自現身。爲除蓋障滿所求願。若欲一切大持明仙現者。以安悉香和酥七日七夜。一明一念大持明仙。一燒滿七日七夜。一切大持明仙皆自現身住是人前。各持明法呈授者。加祐神力隨逐擁護。若欲三千大千世界主帝釋梵王與諸天衆現者。七日七夜以安悉香薰陸香等和酥蜜。一明一念帝釋梵王。一燒滿七日七夜。帝釋梵王與諸天衆。皆自現身說法慰喻。與所求願而擁護之¹²

(『如意輪陀羅尼經』菩提流志訳「誦念法品第三」)

②爾時觀世音菩薩。復說最上祕密功能。若爲利益哀愍一切衆生。攝取令伏遮止惡人。令慈增長念誦即成。能與衆生作大利益。令諸智者得大安樂。貨食增長富貴資具。無不豐足色力滋盛。此呪祕密不得妄說。若欲眞實成就無上如意摩尼大印念誦即成。若已食若未食若淨若不淨。每常誦念悉無過患。誦念之時當念憶觀世音菩薩永作依怙。若貴若賤若男若女沙門外道。稱其名字注心繫念。而誦此呪應以後夜若平明時。男最貴者一千八遍。女最貴者一千十遍。第二貴男誦八百遍。第二貴女誦七百遍。第三貴女誦六百遍。若婆羅門誦五百遍。刹利四百遍。首陀三百。毘舍二百。比丘一百八遍。女人一百三十遍。丈夫一百五十遍。童男六十。童女九十。此念誦法無不歸依。攝百由旬迅疾如風。誦八百遍觀

音眞身現前令見。一切所願皆能與之。一切衆生明呪成就。誦十千遍。聖者執金剛眞身現前令呪者見。如所愛子鞠養抱持。一切明呪皆令成就。凡有所欲願與之令滿。誦十三千遍得見一切諸佛如來。誦滿七日諸呪仙王。皆以眞身現呪者前。各以所成明呪授與。隱蔽其形隨逐擁護。一切安樂無不現前。七日之内每日之中。於後夜時誦三千遍。帝釋天王及諸天女。下來歸依與明呪願。如是等事但誦即成念誦法

了爾時復說見者伏法無上成就。若纔用者一切隨順

牛黃 白檀香 麝金香 龍腦香 麝香 肉豆蔻 白豆蔻 丁香 紅蓮花 青蓮花 金赤土 已上物等分。用白石蜜和之。此是轉輪香。誦呪一千八遍而和合。燒以薰衣塗額塗眼臉上塗身。所去之處如日威光衆所樂見。若在手者悉皆成就。一切衆生若貴若賤。自身及財亦皆歸伏爾時觀世音菩薩。爲利益一切衆生故。復說眼藥之法成就最上。若有用者即得成就決定無疑¹³

（『觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經』寶思惟訳）

女人の成就の考察を行いながら、新たな知見を得ることができた。偶然であったのだが、上記2本の經典はプダク写本チベット大蔵經に収録されている”Phags pa spyan ras gzigs dbang phyug gi yid bzhin nor bu”（『聖なる觀自在の如意宝珠』）の同本異訳であり、その漢訳のなかで女人問題の言及を発見することができたのである。また、内容からどうやらほぼ同じ題材について、上記引用經典文は述べている印象を受ける。

①と②の傍線部を特に注目したい。まず注意すべき点として②では身分の高い者ほど陀羅尼をとなえる回数が多く、男女で比較した場合も男性の方が多くとなえなければいけないと規定している。このことにより諸事の願成就が果たされるとする。

一方①②共に最も身分の高い女性が陀羅尼をとなえる回数が一番多く、次の身分より下位から男性のほうがとなえる回数が女性より多くなっており、バラモンなどの宗教家よりも回数が抜き目出て多く、庶民の男女になると男性の方がとなえる回数が多いことが明記されている。①②共に共通することは男女の性別に視点を置いた場合、貴族と庶民とでは男女の陀羅尼をとなえる回数が反転しており、一貫性がないようにもみえる。また身分の区分に関しては①ほど②は詳細性に欠けている、もしくは省略しているようにも見受けられる。

徳重弘志氏によると、この『聖なる觀自在の如意宝珠』には漢訳4本があり、西暦700年頃に相次いで翻訳された複数の類本が現存し、具体的には菩提流志訳（709年）、義淨訳（710年）、實叉難陀訳（699-700年）、寶思惟訳（706年までに翻訳）、と現段階では考えられている。これらの類本は、そのCHAPTERの構成・文章量に従って、略本（義淨訳、寶思惟訳）と広本（菩提流志訳、實叉難陀訳）とに二分することができるがこれらの4本の訳出時期については古い順から「義淨訳→寶思惟訳→實叉難陀訳→菩提流志訳」というような形で増広されているため、同様の順序で漢訳經典が成立したと大塚伸夫氏も指摘されている。これらの先行研究に基づいて、上記引用經典文を再度みても①が広本②が略本ということになるのだが、本稿の問題意識からいまいちど經典の傍線箇所をみてみると、一番最後に訳出したであろう菩提流支ですら身分や男女間での陀

羅尼受持についてカースト制度ならびに女身下位の思想に基づきつつ、権力者層になる立場の女性がバラモンをはじめ宗教者以上に最も願力が高く、庶民になると逆転して女身より男身の者のほうが、仏界に近づく力量を具えているという理解が垣間見えてくる。陀羅尼をとなえる回数を高い身分の女性に相当な回数を規定していこうという意図については、どのように解釈すべきなのであろうか。①②両者とも、総合的には統一感のない、なにを基準として回数の増減を記述しているのか現段階で筆者は確信をもって論じることができない。論拠がみつからない、現段階で見識がないので予想の域を超えないが、バラモン階級以上に高貴な身分の女性に陀羅尼をとなえる回数を最大量に規定した背景には、「篤信の、身分が最高位である女性」という位置づけに絶対的な仏成就への力量を象徴させ、それ以外の身分の者に対しては、これまでの顕教でみられる男身のほうが有利である、と解釈するのが自然であろうか。これはある特定の女性を複数の男性都合で「女神」に仕立て上げているような事情と酷似している。しかしこれらについて密教学的に、一体どういった見解をなすべきか実のところ、よくわからない。

プタク本を含め他の言語での同經典と比較した際に菩提流支訳がもっとも多いチャプターを揃えているが、果たしてその訳出作業は密教の真意に確実にもとづいているといえるのか、筆者はいささか疑問である。部分的とはいえ、密教的ではないように感じる記述がみられることは、もしや顕教と密教との間に成立した經典なのか、過渡期のものなのか、など予想することもできるのかもしれない。

何故上記のような文言を残したのか、様々な当時の背景やその他の菩提流支に限らず、関連の同本すべての内容をあらためて検証する必要が求められる。

7 総論ならびに今後の課題

女人の仏成就を軸に、漢訳密教經典のいくつかを挙げながら論述を試みてきたが、内容が煩雑になっているので、最後に整理をしていきたい。

まず、本稿では『大正蔵』密教部全4巻のなかで問題点を洗い出していくために、調査を行ってみたのだが、男女間の仏成就における差別問題を中心に読解していく場合、密教の大前提であり特徴として「性差別の概念はない」という不動の回答がある。これを踏まえて所収されている密教部全体をみると、『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』のような、かなり顕教的な經典が散見していた。この当該箇所は男身および女身を分別して、成就の方向性に差異を設けている。上位・下位を示しているとは一概にいえないと思うが、その他の密教經典ではそのような分別の記載がない、という特徴が多くみられるので、かえって異質性が目立つ所感を筆者は抱いた¹⁴。もう少し検証する必要があるが、場合によっては『大正蔵』密教部所収の經典・儀軌類の成立順位や本当にすべてが密教經典といえるものなのか、考証および整理を今一度やり直すべきではなかろうか。

次に、これまでおそらく不空訳『佛說大方廣曼殊室利經』は、初期あるいは中期密教

經典の分類に区分されてきたと思うが、本稿での女人が一切種智を獲得して仏位に入る記載を注視したことにより、十四根本墮罪に記されている「智慧を得た女性を大切にすること」という概念とほぼ一致してくるので、現段階で結論を明言できる状況にはないが、かなり時代的に後のもので進化・発展した密教經典の一種なのか、あるいは後期密教成立時期が思うより早い段階で始まっていたのではないか、という所感を抱いた次第である。生憎、本經典は梵藏經典が残っていない、あるいは発見できていないようである。これ以上の正確な研究を進めるのは困難とはいえ、なんらかの方法で打開できることを期待したい。

最後に顕教にみられる様々な律藏にもとづく戒律と、密教の律藏および戒律の成立背景はだいぶ異なる事情だったのではないか、という点が本稿での考察を行ううちに、次第に筆者のより具体的かつ大きな問題意識を導きだされることになった。特に、初期・中期密教經典とされるものでも、女人優位もしくは「重要かつ擁護されるべき必然の存在」として、現世で受けたこの身体を活かし、男性と同じ目線で仏位を目指し行法に入るとする密教の修法のスタートを切ることになる。密教は従来より男女合一的瑜伽行をなすとはいえ、これは大変複雑混迷とし難解な教理を学修の上でそれぞれの精神世界のみで行う行法であり、そのため通常の日常生活における密教僧に対しての戒律は、顕教のそれとはまったく異質で、世間から隔絶していない代わりに、だからこそ、自分自身を厳しく律することを強く求められる。そのことがおおかたの現存する密教經典の文言から伝わってくるのである。女人成就是性別にかかわらず密教僧に対して心身両面における壮絶で厳しい戒律があるからこそ実現可能とし、顕教では達成しづらい現世での衆生救済への甚大な求心力へ結びつく。

後期密教はそれまでの大乘仏教を含む顕教の教理の最高峰に位置づけられる。インドの地に侵攻してきた外教に対して時輪タントラが対峙することになるが、それ以前より仏法を守るため、厳しい戒律を内包した様々な要素を教理に取り込んだ「密教」が必然的に生じたのではないだろうか。

今後の研究課題として、本稿が密教經典を漢訳のみで整理をしたので、次回からは今回も問題視しているいくつかの密教經典のなかから、サンスクリット語もしくはチベット語の同本をひとつずつ詳細に読解した上で、より正確な考察を行いたい。また、少し題材はずれるが後期になればなるほど男女合一的瑜伽行の教理について、日本中世密教でもかなり重点が置かれ発展することになるので、インド（チベット）後期密教と日本中世密教との比較を少しづつ行い、それぞれの同異点を詳細に逐一考察していくことも目標としたい。

[一次資料]

『大正新修大藏經』 = T, 『大正經』 と略す

『仏書解説大辞典』 = 『仏書解題』 と略す

『密教大辞典』

[二次資料]

大塚伸夫『インド初期密教成立過程の研究』春秋社、2013

Palmo, KS 2013, 'Gender and the soteriology debate in Buddhism: Is a female Buddha possible in non-esoteric Buddhism?', PhD thesis, University of Tasmania.

徳重弘志「『聖なる観自在の如意宝珠』のチベット語訳校訂テキスト および和訳—如意輪観音の名称に関する新出資料—」(『密教文化研究所紀要』32)

吉水千鶴子「ツォンカパの無上瑜伽タントラ解釈」(『日本西藏学会々報』35)

大山公淳「中院流十八道次第の研究(中)」(『密教文化』28)

-
- ¹ 中期密教以前の問題として『法華経』における「一切皆成」と「仏知見不悟入」への言及をまず最初に求める見方も、東アジア仏教からは当然起こりうる見方かと思う。しかし、筆者は『法華経』をはじめ多くの大乘仏教経典と、中期密教経典以降は異なる特性をもって編纂されたと考えている。この中期密教以降のことを考察するのは大変難解である。より一層、大乘仏教を別の角度から養護する立場をとった「原始仏教により忠実である、あるいはインド・イラン語族系の地域から多大な影響を受けた、新しい仏教のグループ」だったのではないかとする推察の元、筆者の今後の研究課題である。よって、本稿の目的から逸脱するため、先述の法華経問題に触れる必要は一切ない。
- ² 杉本卓洲「女性の菩薩」『金沢大学文学部論集・行動科学科篇』9
- ³ 『大日経』「入眞言門住心品第一」T18,pp1c21-2a6
- ⁴ 『金剛頂経』「金剛界大曼拏羅廣大儀軌分第一之五」T18, p220a5-7
- ⁵ 『佛説大方廣曼殊室利經』不空訳「観自在多羅菩薩經曼荼羅品第二」別名：『観自在授記経』T20, p451c9-15
- ⁶ 平岡宏一『チッタマニターラ 瑜伽行修道の方法』法蔵館, 2021
- ⁷ 「一切智」と同義として本稿では捉えるため、同時に「仏智」と同等とみなす。しかし、もし梵蔵経典が存在するのであれば、もう少しこの言語に対して注意深く考究する必要がある。
- ⁸ 中御門敬教「カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究——往生の第二因、七支供養より随喜・勧請・祈願の段——」(『佛教大学総合研究所紀要』19)
- ⁹ 『蘇婆呼童子請問経』「分別道分品第十」T18,pp730b21-c11
- ¹⁰ 『蘇婆呼童子請問経』のことである
- ¹¹ 高田仁覺「インドにおける眞言密教と外教との関係—『蘇婆呼童子請問経』を中心として—」(『密教文化』1988,163)
- ¹² 『如意輪陀羅尼経』菩提流志訳「誦念法品第三」T20,pp189c22-190b16
- ¹³ 『観世音菩薩如意摩尼陀羅尼経』實思惟訳 T20,pp201a6-b16
- ¹⁴ 『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴経』般刺蜜帝譯 T19,pp128b26-129a24。
「世尊由我供養觀音如來。蒙彼如來授我如及國夫人命婦大家。而爲説法令其成就。若有衆生不壞男根。我於彼前現童男身。而爲説法令其成就。若有處女愛樂處身不求侵暴。我於彼前現童女身。而爲説法令其成就。」

キーワード：女人 成就 一切種智 十四根本隨 智慧

